

典礼を豊かにするために 「歌は速く、祈りはゆっくりと」

ザベリオ 赤窄富夫 神父

学生時代、歌の練習時に指導に当たっていた司祭から言われた言葉がある。当時はまだバチカン公会議前で、ラテン語ミサでカトリック聖歌が歌われていた。演歌がはやっていた時代だから、あの調子で歌う人もいたように思う。祈りはといえばやはり速かった。私の場合それは生い立ちと関係がある。子供の頃ミサに参加できない朝は、朝の祈りとロザリオ一環は必ず唱えていた。家族はいつも10人はいたし、皆に祈祷書があるわけでもない。全て暗唱だった。だから自然に速くなっていたし、時として何を祈っているのか分からない位のスピードだった。それもまたオラシヨ（隠れキリシタン時代の祈り）時代の遺産かもしれない。速く祈りを済ませる必要があったからだ。言い訳はともかくとして、典礼は敬虔な雰囲気である方がよい。

又、ある時にはこうも言われた。「私たちは、歌う時メロディをすごく気にして楽譜ばかりを懸命に追っているが、むしろ大事なのは何を歌っているかだ」と。それ以来、言葉即ち何を歌っているかを強く意識するようになったし、又内容を深く理解すると、メロディも自然に浮かんでくるようにさえ思える。典礼聖歌は特にそう感じる。単調なだけに言葉を大事にしないと何を歌っているのかさっぱり分からなくなる。たとえばアレルヤ唱（詠唱）とか共同祈願など。

朗読を依頼された人は、前もって少なくとも10回は読んでおくことが勧められているが、その通りだと思う。答唱詩篇を歌う人もその前の朗読箇所を何回も何回も繰り返し読み、黙想し読まれた前の朗読箇所の出来事に応えるように歌う方が望ましい。答唱詩篇を歌うのは自分の美声を披露する独演会ではない。ミサに参加している者をいかに敬虔な気持ち、賛美と感謝の雰囲気に案内できるかだ。

グレゴリアン聖歌は、いやしの音楽としても利用されているが、日本語の典礼聖歌もそういった音楽にふさわしいものがいくつもあるように思う。カラオケで歌ったり、聴いたりする位典礼聖歌になじんだら、もっと近くに神さまを感じるにちがいない。